

『次第禪門』における一、二の問題

青 木 隆

一 はじめに

『次第禪門』（釈禪波羅蜜次第法門）十二卷は、天台智顗が三十歳代前半という比較的若い時期に講説したものであるが、後年『摩訶止観』に結実される天台止観の成立過程を考えるうえで重要な著作であるとともに、種々の禅観を体系的に整理、統括しているという点で、他に類書を見ないものでもある。本稿では、『次第禪門』において種々の禅観がどのような体系のもとに統括されているかという問題について、一、二の考察を加え、天台止観の成立過程を考える準備作業としたい。

二 『次第禪門』の構成と五種禅

『次第禪門』では種々の禅観が、世間禅・亦世間亦出世間禅・出世間禅・非世間非出世間禅という四種禅によって整理、統括されている。ところが十大章の第七修証章で実際に

詳説されるのは出世間禅の前半、対治無漏までであり、出世間禅の後半である縁理無漏と非世間非出世間禅は不説となっている。いま実際に『次第禪門』で詳説されている禅観を表にして示せば、次のようになる。

四種禅	世間禅	亦世間亦出世間禅	出世間禅 対治無漏
① 四禅 ② 四無量心 ③ 四空処定	① 四禅 ② 四無量心 ③ 四空処定	① 六妙門 ② 十六特勝 ③ 通明観	① 九想 ② 八念 ③ 十想 ④ 八背捨 ⑤ 八勝処
五種禅	根本味禅	根本浄禅	観禅

⑥ 十一切処	
⑦ 九次第定	練禪
⑧ 三三昧	
⑨ 師子奮迅三昧	薰禪
⑩ 超越三昧	修禪

右の表の下段に記した五種禪（根本・観・練・薰・修）という分類は十大章の第四詮次章に述べられていて、また『法華玄義』巻四上、行妙のうちの定聖行を語るなかにも継承されているが、これは南岳慧思の創案に成るものである。『維摩經文疏』巻十一に、次のように言われている。

今明、三藏教三乘人入滅受想定、凡有五処得入不同。一者根本通明淨禪入滅定。二依八背捨觀禪入滅定。三依九次第定練禪入滅定。四依師子奮迅薰禪入滅定。五依超越修禪入滅定。初出大集經、後四出大品經。此是南岳禪師之所出也。（統藏一一二八一、三二右下へ左上）

つまり現行の『次第禪門』は四種禪という分類とともに、慧思による五種禪という分類も並行して用いられているわけである。これは要するに、慧思による分類を採用しつつも、それを包括する、より大きな枠組みとして、智顗は四種禪という四句分別による分類を用意したのであるが、結果的に『次第禪門』として成立したものには、慧思によって整理さ

れた範囲を越える禪観は語られていないと言えるであろう。

なお、五種禪という分類が何に依拠するものであるかは明らかではなく、古来、慧思の創案であるとされている。しかし味・淨・無漏という分類や練禪、薰禪という名称は阿毘曇で用いられているものである³⁾。智顗は『次第禪門』の各所で、阿毘曇における用法との相違を主張しているものの、用語自体は阿毘曇から借りてきたものと思われる。

三 亦世間亦出世間禪の性格

既に佐藤哲英博士によって指摘されているように、世間禪、出世間禪に属する禪観はすべて『大品經』及び『大智度論』に見出されるものである。ところが亦世間亦出世間禪に属する六妙門や通明観は、それらに見出すことができない。そこで、この亦世間亦出世間禪がどのような経論に依拠し、どのような性格を有しているかを次に考えてみたい。

まず、六妙門と十六特勝は、ともに古くは安世高訳の大安般守意經に説かれ、またその他、阿毘曇毘婆沙論、成実論等の多くの経論に見出すことができる。近くは淨影寺慧遠の『大乘義章』巻十二に六妙門は六修定の名で出ており、また巻十六本に十六特勝は詳説されていて、いかに研究されていたかがわかる。またそれらは、ただ単に研究されていたのではなく、習禪者によって実習されていたようであり、特に

十六特勝は『統高僧伝』巻十七、慧思伝に「法華三昧大乘入門、一念明達、十六特勝背捨除入、便自通徹、不_レ由_レ他悟_二」（大正五〇、五六三上）と言うように、慧思によっても修されていたものである。

次に通明観については、『次第禪門』巻八に次のように述べられている。

所以此禪名為通明観者、此観方法出_二大集經_一、文無別名目。北国諸禪師修得此禪、欲_二以授_レ人、既不_レ知_二名字_一、（中略）所以諸師別作_二名目_一、名為通明観禪。（大正四六、五二九上）

右に言うように、通明観は『大集經』巻二十二、虚空目分、声聞品の記述による禪観であるが、その名称は「北国諸禪師」によって付けられたものである。この「北国諸禪師」が具体的にどのような人々を指すかは明らかではない。『統高僧伝』には、北魏の曇鸞が『大集經』の研究を志し、また北齊の靈裕が注釈を著したと伝えられていて、北地において『大集經』が研究されていたことは知られるが、その禪観を修していた習禅者は確認できず、今後の研究に俟たなければならない。

また通明観には『提謂經』に基づく禪観も取り込まれている。そしてそれが道教の存思法である五臓観であることは注目に値するであろう。つまり曇靖が『提謂經』を述作した時に道教經典を剽窃し、そのことによって道教の五臓観が禪観

の一種として仏教側にも用いられるようになったのである。たとえば、東晋期の成立とされる『太上靈宝五符序』の巻上には次のような記述があるが、この文は『提謂經』の中に取

り込まれ、さらに『次第禪門』にも引用されている。
人頭円象_レ天、足方法_レ地。髮為_二星辰_一、目為_二日月_一、眉為_二北斗_一、耳為_二社稷_一、鼻為_二丘山_一、口為_二江河_一、齒為_二玉石_一。四肢為_二四時_一、五臟法_二五行_一、亦為_二五帝_一、亦為_二五曹_一。上為_二五星_一、下為_二五岳_一、内為_二五王_一、外為_二五德_一、升為_二五雲_一、化為_二五竜_一。

五臓観とは五臓の一々に体内神の存在することを内視し、さらに右の引用からも窺えるように、五臓や身体の各部位が日月星辰、丘山江河などの天地万物と相即する様を観想するものである。この五臓観が『提謂經』を経由して、通明観の初歩の段階の観法として用いられているのである。ただし、何故に『大集經』に基づく禪観の中に、この観法が組み込まれているのかは明らかではない。

さて以上の考察から、亦世間亦出世間禪の性格のひとつとして、それらは『次第禪門』が講説された以前に、個々に実習されていた禪観であったことが知られる。そしてそれらは『大智度論』には詳説されていないものの、智顗としては『次第禪門』の中で言及しなければならない必要性を感じ、これを亦世間亦出世間禪、即ち世間禪と出世間禪の両方の性格を有するものとして位置付けたのであろう。

『次第禪門』における一、二の問題（青木）

次に亦世間亦出世間禪の性格として、それらがいずれも不定止観であることが挙げられる。六妙門は後に『六妙法門』の中でより詳細に説かれ、それは不定止観として位置付けられているので、多言を要さないであろう。十六特勝については、次のように述べられている。

今明、悟道未_レ必_レ應須_二具_一十六_一。或得_二三_一特勝_一、即便得悟。亦利根者、初_レ隨息時、覺_二悟無常_一、即便悟道。此隨_レ人不定也。（大正四六、五二八下）

右のように十六特勝も、必ずしも十六を次第に修さなければならぬものではないとされ、不定止観の性格を持つている。また通明観も、卷八冒頭で、六通三明を發することが余禪よりも利疾であると説かれ、さらにこの禪に次位はなく、四禪、四空処のような次第禪とは性格を異にするものであると説かれていることから、不定止観の性格を有していると言つてよいであろう。

以上、亦世間亦出世間禪の性格として、ひとつに、それらが智顗以前に盛んに実習されていた禪観であること、さらにそれらは不定止観の性格を有していることの二点を指摘した。

四 おわりに

『次第禪門』において種々の禪観がどのような体系のもとに統括されているかという問題について若干の考察を加えた。

後年『次第禪門』は漸次止観を説くものであり、『摩訶止観』は円頓止観を説くものであるという位置付けがなされる。その位置付けは妥当なものであるが、その場合『次第禪門』講説時に、既に智顗に円頓止観の構想があったのか、もしあったとすれば、それは『次第禪門』の内容から知ることができるか、またなかったとすれば、いつ頃智顗にその構想が生まれたのか、という問題が考えられなければならない。このような問題については今後の課題としたい。

1 味・淨・無漏は『阿毘曇心論經』卷四（大正二八、八五六上）、『大智度論』卷十七（大正二五、一八六上）等に見える。練禪は『大智度論』卷十七（一八七中）、薰禪は『阿毘曇心論經』卷五（八五九上）に見える。

2 『天台大師の研究』一一五頁以下。

3 文物出版社本道藏卷六、三二一中。これと同様の文がベリオ本『提謂經』（牧田諦亮『疑經研究』一八四頁以下）の四六行、一二六行、及び『次第禪門』卷八（大正四六、五三二中下）に見える。

4 五藏観については、前田繁樹『老子中經』覚書（坂出祥仲編『中国古代養生思想の總論的研究』所収、坂出祥仲『隋唐時代における服丹と内観と内丹』（同上）参照。

『追記』發表後、早稲田大学教授小林正美先生から、『提謂經』の文言は『靈寶五符序』よりもむしろ『老子中經』に、より近似する。」と、御教示をいただいた。謝意を表します。

〈キーワード〉『次第禪門』天台智顗、五種禪、通明観、『提謂經』

（麻布学園教諭）